科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成　２６　年　　６　月　１３　日現在

機関番号：　３４５０４
研究種目：　基盤研究(C)
研究期間：　2011～2013
課題番号：　２３５２０３４６

研究課題名（和文）ヘミングウェイ文学と「メディア」の政治学

研究課題名（英文）Ernest Hemingway and Media Politics

研究代表者
塚田　幸光（TSUKADA, Yukihiro）

関西学院大学・法学部・教授

研究者番号：４０５１３９０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円、（間接経費）　　720,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、アーネスト・ヘミングウェイの文学とニューディール時代のメディア政治学との関係を考察した。『ケン』、『ＮＡＮＡ』、『ライフ』などのジャーナルに寄稿した、ヘミングウェイの周縁的作品／テクストの文化的・歴史的コンテクストを探り、アメリカ文学の新たな側面を明らかにした。そして、メディア政治学がアメリカ文学・文化に与えた複数の影響についても分析を試みた。

研究成果の概要（英文）：This study attempted to illustrate the relationship between Ernest Hemingway's literature and the media politics in the New Deal era. We've explored the cultural-historical context of Hemingway's minor/marginal works in KEN, NANA, and LIFE, revealing a new aspect of American literature. And we've analyzed the influences of the media politics on American literature and culture.

研究分野：　英米・英語圏文学

科研費の分科・細目：　文学・英米・英語圏文学

キーワード：　プロパガンダ　ヘミングウェイ　メディア　映像文化　映画　表象　身体

１．研究開始当初の背景

アーネスト・ヘミングウェイは、20 世紀アメリカを象徴する文化的アイコンでありながら、政治的には極めて複雑な立場を生きた作家である。彼は、米国とキューバというイデオロギー的に相反する国家の「国民作家」であるという事実に限らず、スペイン内戦への参加以来、左翼思想に接続する作品を矢継ぎ早に発表しているからだ。

しかしながら、政治とメディア、そしてヘミングウェイ文学の結びつきは、従来の文学研究では軽視され、殆ど考察されていないのが現状である。彼の政治的「転向」の契機となったスペイン体験を見ても、同時代のニューディールに接続する研究は皆無に近い。1930 年代後半とは、FSA のドキュメンタリー写真がニューディールの全体主義を映し出し、左派系ドキュメンタリー映画が隆盛を極めた「政治とメディア」の時代である。スペイン内戦に際し、北米新聞連盟（NANA 通信）の特派員として現地入りしたヘミングウェイが積極的に与したのは、共産主義者の映画監督ヨリス・イヴェンスとの映画制作ではなかったか。ヘミングウェイのスペイン体験を通じて見えてくるのは、ジャーナルとフィルムの交差に加え、短編「蝶々と戦車」や長編『誰が為に鐘は鳴る』に至るクロスメディアに他ならない。

以上の背景により、ヘミングウェイと政治、そしてメディアの関係をさらに考察する必要が生じた。

２．研究の目的

本研究は、ヘミングウェイ文学と「メディア」の政治学との交点を探る独自のものである。ニューディールの FSA/OWI の写真や映像、左派系ドキュメンタリー映画、ジャーナル記事や関係者のレターなど、ヘミングウェイ文学の「周縁的」な要素から、その本質を逆照射し、ヘミングウェイ文学のクロスメディア研究を深化させることが目的である。

また、本研究は、科学研究費補助金「若手研究（B）」（H21～H22）で行った「ヘミングウェイ―イヴェンス書簡」の実証的研究を補完し、広い視座へと研究を敷延するものである。特に、第一次世界大戦、スペイン内戦、キューバなど、ヘミングウェイを政治へと繋げる契機となった「場」と「戦争」に焦点を当て、彼の政治性を逆照射する。

３．研究の方法

本研究は、ヘミングウェイ文学とメディアとの交差を実証的に探るものである。小説（短編、長編、詩編）、書簡、ジャーナル、ドキュメンタリー・フィルム、写真などを積極的に精査し、文学とメディアとの関係を再考する。

また、ケネディ図書館、議会図書館、公文書館における調査を軸に、ヘミングウェイの周縁テクストの調査を行う。当然のことながら、渡米の前段階として、300 編以上もあるジャーナルや『ヘミングウェイ書簡集』の調査は不可欠である。特にヘミングウェイが寄稿した左派系雑誌『ケン』やフォトジャーナル『ライフ』など、ジャーナル研究は重要であり、小説や書簡との接続を探る最良の「テクスト」となる。

1 年目は、OWI/OSS 関連のプロパガンダ資料の調査に集中する（OSS の資料は、カタログだけでも膨大な数に及ぶ。未整理状態ゆえ、過去に作成された部分的なカタログを頼りに、手探りの調査となる）。ケネディ図書館のヘミングウェイ・コレクションで、閲覧可能な資料を調査し、必要なものを複写、パソコンにデータ入力する。加えて、スペイン内戦前後のニューディール期の文献に集中する。ケネディ図書館には、科学研究費補助金「若手研究（B）」の際にも訪問しているので、資料調査の連続性を保つため、再びヘミングウェイ・キュレイターのスーザン・ウォンの助力を得る。

2 年目も、ニューディールとヘミングウェイとの関係を軸に資料を探る。特に、左派系の雑誌『ニュー・マッセズ』や『ケン』とヘミングウェイとの関わりを、レターを含む「人物」関係から明らかにする。ニューディールとヘミングウェイ文学の政治的相関図を整理し、30 年代の左派系ドキュメンタリー映画／写真と左派系文学の隆盛、共産主義の変貌、全体主義としてのニューディール等、激動の時代におけるヘミングウェイ文学の付置とメディアの役割を再考察する。

3 年目は、1940 年代の資料を調査のターゲットとする。特に、スペイン内戦を受け、ジャーナルやドキュメンタリーを経て、ヘミングウェイが執筆を開始するスペイン短編小説群（「蝶々と戦車」等）や長編『誰が為に鐘は鳴る』などの小説（フィクション）関連の調査を行う。小説の「周縁」的な文書資料を重視する。1940 年とは、彼がキューバへ移住を決め、政治色を強めた年である。大戦前夜、ローズベルトのメディア政策が右傾化する中で、ヘミングウェイの文学は如何に変貌を遂げ、政治化したのかを考察する。

４．研究成果

ヘミングウェイ、メディア、政治の関連性を探る試みは、複数の分野を横断する研究である。それゆえ、ヘミングウェイ研究を軸に、幅広いメディア研究へと発展させた。この成果は、3 年間で 10 冊（共著・編著）の図書、9 件の学会発表、3 編の投稿論文に結実している。

ヘミングウェイ研究に関しては、まず『ヘミングウェイと老い』（松籟社）に寄稿した論文「睾丸と鼻–ヘミングウェイ・ポエトリーと「老い」の身体論–」がある。1920 年代の睾丸移植手術というスキャンダルと同時代のメディア、そしてヘミングウェイの初期

詩編を結びつけ、傷痍軍人という視座から、大戦のダークサイドを考察した。『交錯する映画』（ミネルヴァ書房）に寄稿した論文「ゲルニカ×アメリカ–ヘミングウェイ、イヴェンス・クロスメディア・スペイン–」は、本研究の集大成である。モダニズム／ファシズムの時代に対し、ヘミングウェイは如何に内戦の現実に迫り、その瞬間を活写したのか。ジャーナル、フィルム、ノヴェルという複数メディアを通じて見えてくる「スペイン」の政治学、そしてヘミングウェイ文学との交差を論じた。

さらに『アメリカ文学における「老い」の政治学』（松籟社）では、論文「「老い」の／と政治学–冷戦、カリブ、『老人と海』–」において、スペイン内戦を経験し、ファシズムを告発した作家が、冷戦時代に「老人」を描くギャップ、つまり「老人」に付与された文化の政治学、政治の文化学を論じた。また、編者も務めた『アーネスト・ヘミングウェイ 21 世紀から読む作家の地平』（臨川書店）には、論文「ライティング・ブラインドネス–ヘミングウェイと「老い」の詩学–」を寄稿した。本論文では、ヘミングウェイの最晩年、1957 年に発表された二つの「盲目」の物語「盲導犬としてではなく」「世慣れた男」に焦点を当てた。眼差しで世界に触れようとした「視」の作家が、最晩年で盲目を描く。「視」の作家から「非視」の作家への変貌について、議論した。さらに、約 1000 頁の大著『ヘミングウェイ大事典』（勉誠出版）では、編集委員を務め、約 60 項目について執筆している。

文学研究の一環としては、フォークナー、ハ・ジン、田村泰次郎についても書いている。『越境する文化』（英光社）に寄稿した論文「プロファイリング・ホワイトネス–Faulkner、黒人乳母、*Go Down, Moses*–」では、南部白人が体現するメタフォリカルな白さ（ホワイトネス）に注目し、『行け、モーセ』を軸に、フォークナーの創作との関係を探った。『AALA Journal』に寄稿した論文「繭と穴–ハ・ジン、フォークナー、交叉する語り–」では、ハ・ジンというアジア系アメリカ文学とフォークナー的キャノンとの関係をインターテクスチュアリティの視座から考察した。さらに、論文「「性」を＜縛る＞–GHQ、検閲、田村泰次郎「肉体の門」–」では、占領期の有楽町という文化的、政治的コンタクトゾーンにおける「性」表象に関して、田村泰次郎の短編小説「肉体の門」を軸に考察した。

クロスメディア研究に関しては、『冷戦とアメリカ』（臨川書店）に寄稿した「福竜・アンド・ビヨンド–エドガー・A・ポウとニュークリア・シネマの政治学–」がある。ここでは、ハリウッドの身体表象に焦点を当て、核／冷戦時代の映像の政治学を考察した。冷戦が召喚したエドガー・A・ポウという文化的アイコンと、ニュークリア・シネマの交差を見つめ、自閉するアメリカの政治性を論じた。また、『ヘミングウェイ研究』に寄稿した「シネマ・アンド・ウォー–ヘミングウェイとメディアの性／政治学–」では、モダニズム／ファシズムの時代、映画は如何なる役割を果たし、そこには如何なるメッセージが潜むのかを考察した。

映画研究に関しては、以下の 3 編がある。『アメリカン・ロード　光と陰のネットワーク』（英宝社）に寄稿した「ファミリー・オン・ザ・ロード–『リトル・ミス・サンシャイン』とアメリカン・ドリームの行方–」では、1980 年代以降に変容する「ロード・ムーヴィー」が、如何にアメリカの夢を映し出し、時代のイデオロギーに接続したのかを論じた。編著『映画の身体論』には、論文「メイル・ボディの誘惑–ニューシネマ、身体、ポルノグラフィ–」を書いた。ニューシネマの性と政治が交差する「場」として、男性身体に焦点を当て、その身体に照射される複数の欲望を論じた。さらに『＜風景＞のアメリカ文化学』（ミネルヴァ書房）には、論文「ユートピア、ディストピア、サバービア–ダニー・ボイル『ザ・ビーチ』とハリウッドの「楽園」–」を寄稿した。本論文では、ハリウッドの「楽園」イメージが隠蔽／開示する「アメリカ」が、如何にユートピア／ディストピア・ナラティヴを増殖させ、同時に消費文化的トポス／サバービアへと接続するかを論じた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① 塚田幸光、「「性」を＜縛る＞–GHQ、検閲、田村泰次郎「肉体の門」–」、『先端社会研究所紀要』、関西学院大学、査読なし、第 11 号、2014 年、pp.47-60.

② 塚田幸光、「繭と穴–ハ・ジン、フォークナー、交叉する語り（カイアズマティック・ナラティヴ）–」、『AALA Journal』、アジア系アメリカ文学研究会、査読あり、第 19 号、2014 年、pp.10-21.

③ 塚田幸光、「シネマ・アンド・ウォー–ヘミングウェイとメディアの性／政治学–」、『ヘミングウェイ研究』、日本ヘミングウェイ協会、査読あり、第 12 号、2011 年、pp.31-46.

〔学会発表〕（計 9 件）

① 塚田幸光、「シャドウ・ビハインド–上山草人と「奇」のハリウッド–」（招待講演）、早稲田大学演劇博物館（早稲田大学）、2014 年 1 月 29 日

② 塚田幸光、「ニューシネマ・ターザン–チーヴァー、ペリー、『泳ぐひと』–」（招待講演）、日本アメリカ文学会第 23 回北海道支部大会（シンポジウム「物語はジャンルを横断する」）（北海学園大学）、2013 年 12 月 14 日

③ 塚田幸光、「二つの文革とアメリカの影–イーユン・リー、ハ・ジン、ディアスポラ–」（招待講演）、アジア系アメリカ文学研究会（シンポジウム「アジア系アメリカ文学再読–アメリカ文学研究のパースペクティヴから」）（神戸大学）、2013 年 9 月 21 日

④ 塚田幸光、「焼跡の「アメリカ」–GHQ、性、田村泰次郎「肉体の門」–」、比較文学会関西支部 4 月例会（甲南大学）、2013 年 4 月 20 日

⑤ 塚田幸光、「クロスメディア・ヘミングウェイ–ニューディール、ギリシア・トルコ戦争、「スミルナの桟橋にて」–」、日本アメリカ文学会東北支部 9 月例会（東北大学）、2012 年 9 月 8 日

⑥ 塚田幸光、「フリークス・アメリカ–ヘミングウェイ、ロン・チャニー、身体欠損–」、アメリカ学会第 46 回年次大会（名古屋大学）、2012 年 6 月 1 日

⑦ 塚田幸光、「「食」をめぐる政治学–マカジキ、カニバリズム、『老人と海』–」、日本ヘミングウェイ協会ワークショップ（ミニシンポ「ヘミングウェイと動物表象」）（専修大学）、2012 年 5 月 26 日

⑧ 塚田幸光、「顔と戦闘–Hemingway、Ivens、ポリティカル・スペイン–」、日本アメリカ文学会第 50 回全国大会（関西大学）、2011 年 10 月 8 日

⑨ 塚田幸光、「核とマネキン–ニュークリア・シネマの政治学–」、ASLE-Japan／文学・環境学会第 17 回全国大会（明治大学）、2011 年 8 月 27 日

〔図書〕（計 10 件）

① 塚田幸光、「福竜・アンド・ビヨンド–エドガー・A・ポウとニュークリア・シネマの政治学–」、『冷戦とアメリカ　覇権国家の文化装置』村上東編著、臨川書店、2014 年、pp.89-117.

② 塚田幸光、「睾丸と鼻–ヘミングウェイ・ポエトリーと「老い」の身体論–」、『ヘミングウェイと老い』髙野泰志編著、松籟社、2013 年、pp.139-160.

③ 塚田幸光、「ファミリー・オン・ザ・ロード–『リトル・ミス・サンシャイン』とアメリカン・ドリームの行方–」、『アメリカン・ロード　光と陰のネットワーク』花岡秀編著、英宝社、2013 年、pp.266-292.

④ 塚田幸光、「ゲルニカ×アメリカ–ヘミングウェイ、イヴェンス、クロスメディア・スペイン–」、『交錯する映画　アニメ・映画・文学』杉野健太郎編著、ミネルヴァ書房、2013 年、pp.201-227.

⑤ 塚田幸光、「プロファイリング・ホワイトネス–Faulkner、黒人乳母、*Go Down, Moses*–」、『越境する文化』丸橋良雄編、英光社、2012 年、pp.188-195.

⑥ 塚田幸光、『ヘミングウェイ大事典』今村楯夫・島村法夫編著（塚田幸光は編集委員）、勉誠出版、2012 年、pp.55-58, 87, 120, 124, 309-313, 354-358, 392-394, 642-644, 681-682, 686-687, 693, 697, 722-724, 769-771, 811-828, 831-833, 862-865.

⑦ 塚田幸光、「「老い」の／と政治学–冷戦、カリブ、『老人と海』–」、『アメリカ文学における「老い」の政治学』金澤哲編著、松籟社、2012 年、pp.155-175.

⑧ 塚田幸光、「ライティング・ブラインドネス–ヘミングウェイと「老い」の詩学–」、『アーネスト・ヘミングウェイ　21 世紀から読む作家の地平』日本ヘミングウェイ協会編（編集委員　大森昭生・小笠原亜衣・髙野泰志・塚田幸光・長谷川裕一）、臨川書店、2011 年、pp.270-271, 318-332.

⑨ 塚田幸光、「メイル・ボディの誘惑–ニューシネマ、身体、ポルノグラフィ–」、『映画の身体論』塚田幸光編著、ミネルヴァ書房、2011 年、pp.iii-xi, 211-242.

⑩ 塚田幸光、「ユートピア、ディストピア、サバービア–ダニー・ボイル『ザ・ビーチ』とハリウッドの「楽園」–」、『＜風景＞のアメリカ文化学』野田研一編著、ミネルヴァ書房、2011 年、pp.229-249.

〔その他〕
ホームページ等
http://www.kwansei.info/html/36906.html
（関西学院大学法学部　塚田幸光研究業績）

６．研究組織

(1)研究代表者

塚田　幸光（TSUKADA Yukihiro）
関西学院大学・法学部・教授
研究者番号：４０５１３９０８